精力的に協力して頂き編纂が完了したことにまとめ役の委員として感謝している。

尚、医療短大部として収集した資料は全てが掲載されたわけでわない。未掲載のものは平成八年四月発足予定の「名古屋大学史資料室」に整理、保存されることになっているので御利用いただきたい。

最後に、この名古屋大学五十年史完成と共に三〇年間お世話になった名古屋大学を定年で去ることになり感慨深いものがある。

（医療技術短期大学部教授）

回顧

元編集委員　片岡　順

五〇年史の農学部編さん委員を引き受けるとき、気軽く考えていた。それは数年前に農学部三〇年史が編さんされていたからである。農学部三〇年史は昭和五一年、各学科から選ばれた委員によって委員会が構成され、山本良三教授が委員長に互選された。そして、資料収集は精力的に進められた。

戦後開設された農学部は、大きく三つの時期にわけられる。創設期、安城時代、そして東山統合時代である。幸いこれらの時期を過ごされた人達がご健在であったために、私の知らなかったエピソードが手記として沢山寄せられた。

五〇年史の編さんにあたり、農学部の三〇年史を再度読んでゆくうちに、当初の気軽な気持ちはだんだんと消え

てきた。それは、苦労された方達の手記が興味深いものであり、このような内容を自分の拙い作文で、うまくまとめられるかという気の重さがつのってきたからである。

一方、農学部三〇年史を再度熟読するうちに、これを名古屋大学五〇年史に編さんするという気の重さよりも私の若い時の思い出が浮かび、ついつい追憶の世界にひたってしまった。

昭和三〇年農学部に就職した私は、思えば激しく動いていた農学部の発展の真只中にいたことになる。当時、安城市にあった農学部は東山移転という大問題をかかえていた。この事情については、故人となられた宗像桂教授の書かれた、亡くなられた当時の農学部長の五島善秋教授とともに苦労された手記は、若い私達が知らないで勝手なことを言っていたと冷や汗がでる思いを生じさせるものであった。

東山への移転の希望とは別に安城時代は、若々しい楽しい時代であった。山本良三教授は、活気あふれる安城時代の学園生活をあざやかに思い出す手記を書かれている。いろいろな追憶の中にひたりながら、これをまとめるという仕事に立ちかえるという繰り返しが私の中に生じていたのを思い出す。

農学部の歴史をまとめるには、先ず人の動きをできるだけくわしく挙げて、その中で時代の動きを表現しようと思い立ってから、気の重さは幾分軽くなった。

農学部の各学科から、多くの協力者を得た。そして農学部三〇年史編さん以降の資料について出来るだけ整理した。平成二年私は停年を迎えたので、あと始末は旭正教授にまかせて退官した。この紙面をかりてご協力いただいた各位に深く感謝したい。

（名古屋大学名誉教授）

てくれた。のちには編集作業で必要となる校正実務を通信教育で勉強していた。年史編集日程の遅れにより、彼女がその校正の実力を発揮することができなかったのは残念なことである。

私は編集室在職中、多数の方々に支えられて仕事をしてきた。学内外から資料をお寄せ頂いた方々をはじめ、飯島、早川両学長、編集委員や執筆を担当された諸先生方、事務官諸兄等々……。これらの多くの方に出会えた幸せな環境で仕事ができたことを感謝しながら、筆を擱くこととする。

（朝日大学教授）

回顧

元専任編集室員　勝山吉章

専任編集室員としての経験は、現在の私にとって本当に貴重な宝物となっています。

一九八八年の春、ベルリン・フンボルト大学に留学中。江藤先生から井上知則助手の後任になる気持ちがあるかどうかの有無を尋ねる手紙が来ました。正直言って「ほんまかいな？」と思いました。

私の専門は十九世紀のドイツの幼児教育史。日本の高等教育史に関してはほとんど無知といってよいぐらいでした。篠田弘教授のゼミで、日本教育史研究の初歩的事項は学んだとはいえ、不安だらけの出発でした。

助手に着任した当初は、『部局史』の原稿があがってくる最中で、江藤先生や井上さんと各部局を廻りながら、原稿の催促をしてまわりました。どの先生も多忙ななかでの執筆だったため、なかなかいいご返事をいただけなかっ

たのですが、『部局史』が完成したとき、「いい勉強になった」と多くの先生方から言っていただき嬉しく思いました。自分の研究や生活の基盤について、ほとんどの大学人は知らないのが現状だと思います。大学史編纂は、大学人のアイデンティティー形成および近年問題化している大学の自己評価と密接なかかわりをもつと言えるでしょう。

大学史編集室は庶務部庶務課に所属していたことから、本部事務官と一緒に仕事をすることが多々ありました。このことが私にとって本当に勉強になりました。事務官たちの仕事の手際よさ、自分を殺して「筋」を通していくその姿勢から多くのことを学びました。現在、私立大学のポストについている私が、周囲から学内業務についてしばしば「優秀」と評価されるのも、本部事務官の仕事ぶりをみてきたからだと思います。

『部局史』刊行によって、既に学生部長職に就いていた江藤先生が編集委員長兼編集室長を退かれ、加藤先生が編集委員長に篠田先生が編集室長に就任されました。江藤先生は組織上なにもない状況下で、名古屋大学史編纂事業と編集室を発足させ充実させてこられたわけで、大変なお仕事をされたと今になって思います。また、井上助手も大変なご苦労をされました。庶務課のみなさんもあたたかいご援助を下さいました。

加藤新体制下で、専任編集室員が学内の定員流用によって二名増員となり、片岡さんと吉川さんが新たな戦力として加わりました。近藤（市川）和美さんを加えて、四名体制になったのです。編集作業には何よりもチームワークが肝心なので、教育学部関係者で気心の知れた者同志が集まりました。それで編集室に行くことが大変楽しくなりました。

新体制下では、『写真集』の完成をまず目指しました。井上助手が相当数の写真等資料を集めていたとはいえ、写真集の刊行にはまだまだ不十分でした。片岡・吉川両助手と手分けして、あちこちからアルバム等を借りてきては複写したのですが、その際に、近藤和美さんが本当に素晴らしい能力を発揮してくれました。膨大な写真等資料

の分類、整理は簡単なようですが、歴史的な視点が不可欠なため、大変な作業なのです。それを近藤さんは、ほとんど一人でこなしてくれたわけで、『写真集』が刊行できたのも近藤さんのおかげといっても過言ではありません。よくやって下さいました。

『写真集』では、篠田先生の指揮下で、歴史的区分に応じて膨大な資料のなかから写真資料をセレクトしました。そして、クィックスのデザイナー山内さんに、デッサンをお願いしました。山内さんは芸術大学出身だけあって、みごとな手腕を発揮されました。

私は『写真集』の刊行が終わって、私立福岡大学に転じました。ですから、もっとも「しんどい」はずの『通史』には直接関わっていません。片岡・吉川両助手そして私の後任である高木助手には本当にすまない気持ちです。

編集室で私は育てられました。このことを、私学に転じた今、はっきりと認識しています。加藤現総長にご指導いただいたことも、懐かしい思い出です。編集室がアーカイヴズとして発展すると聞き、加藤総長、篠田編集委員長のご尽力に衷心より感謝しています。そして何よりも、編集室助手の機会を与えて下さった江藤先生には申し上げる言葉もございません。

（福岡大学助教授）